

鳥追

一名 鳥追船

金剛弥五郎作

男 左近尉

シテ 日暮の妻

子方 日暮の子花若

ワキ 日暮の何がし

トモ 日暮の従者

地は 薩摩

季は 秋

男詞

「かやうに候ふ者は。九州薩摩の国日暮殿の御内に。

左近尉と申す者にて候。さても此日暮の里と申すは。前には大河流れ。末は湖水につゞけり。此湖より村鳥あがつて。浦向ひの田を食み候ふ間。毎年鳥追船をかざり。田づらの鳥を追はせ候。又頼み奉る日暮殿は。御訴訟の事あるにより。御在京にて候ふが。其御留守に北の御方と。花若殿と申す幼き人の御座候。あまりに鳥追はせうずる者も

シテ詞

「左近尉とは何の為に唯今来り給ふぞ。

男

「さん候ふ殿は此秋の頃御下向あるべき由申し候。

シテ

「如何に花若がうれしう候ふらん。

男

「又唯今参る事余の儀にあらず。当年某が船に。更に鳥追はせうずる者なく候へば。花若殿御出であ

つて鳥を追うて御遊び候へかし。左様の事申さん
為めに参りて候。

シテ「何と花若に田づらの鳥を追へと申すか。花若はい
とけなけれども。左近尉が為めには主にてはなき
か。主に鳥追へなどゝ申すは。かゝる左近尉ほど
情なき者こそなけれ。

男「何と左近尉は情なき者と仰せ候ふか。まづ御心を
静めて聞し召され候へ。人の御留守などゝ申すは。

五十日百日。乃至一年半をこそ御留守とは申せ。
既に十箇年に余り。扶持し申したる左近尉が情な
き者にて候ふか。所詮詞多き者は品少なしにて候
ふ程に。花若殿御出であつて鳥御追ひなくは。此
屋をあけて何方へも御出で候へ。

シテ「実にく申す処理にて候。花若が事はいとけなく
候へば。みづから出でゝ鳥を追ひ候ふべし。

男「それこそ思ひもよらぬ事にて候へ。花若殿の御事

はいとけなき御事にて御座候へば。苦しからざる御事にて候。上臈の御身にて御出であるべきなど、仰せ候ふは。某が名を御立て候はんずるために仰せ候ふか。

シテ「さらば花若一人は心もとなく候へば。二人ともに立ち出で鳥を追ひ候ふべし。

男「それはともかくも御はからひにて候ふべし。さらば明日舟を浮べて待ち申さうずるにて候。

シテサシ「実にや花若ほど果報なき者よもあらじ。さしもいはひて月の春の。花若とかしづくかひもなく。おちぶれはてゝあさましや。

下歌地「賤が鳴子田引き連れて。鳥追船に乗らんとて。

上歌「ともに涙の露しげき。く。稲葉の鳥を立てんとて。人も訪はざる柴の戸を。親子ともなひ立ちいづる。く。(中入)

ワキ次第「秋もうからぬ故郷に。く。帰る心ぞうれしき。

詞

「これは九州日暮の何某にて候。さても某自訴の事あるにより。十箇年に余り在京仕り候ふ処に。自訴悉く安堵し喜悅の眉を開き。唯今本国にまかり下り候。如何に誰かある。

トモ

「御前に候。

ワキ

「あなたに当つて笛鼓の音の聞え候ふは。何事にて有るぞ尋ねて来り候へ。

トモ

「畏つて候ふ。

ワキ

「実にくさる事あり。九州にては此鳥追舟こそ一つの見事にて候へ。此舟を待ちて見ばやと存じ候。

男サシ

「面白や昨日の早苗いつの間に。稲葉もそよぐ秋風に。田面の鳥を追ふとかや。

シテ子

「我等は心浮鳥の。下安からぬ思ひの数。

ワキ

「群れるる鳥を立てんとて。身を捨舟に羯鼓を打ち。

シテ子

「或は水田に庵を作り。

シテ「又は小舟に鳴子をかけ。

三人「声」引きつるゝ。湊の舟の落汐に。

地「浮き立つ鳥や騒ぐらん。

シテ「鳥も驚く夢の世に。

地「我等が業こそ現なき。

地「実にや夢の世の。何かたとへにならざらん。く。

身はうたかたの水鳥の。浮寝定めぬ波枕。うちな
びく秋の田の。穂波につれて浮き沈み。おもしろ

の鳥の風情や。此頃は。なほ秋雨の晴間なき。水
陰草に舟よせて。我等も年に一夜妻。逢ひもやす
ると天の川。うはの空なる頼みかな。く。

シテサシ

「さるにても殿は此秋の頃。下り給ふべきなどゝ申
しつれども。それもはや言葉のみにて打ち過ぎぬ
れば。後々とても頼みなし。たゞ花若が果報のな
きこそうたてしう候へ。

子「実にや落花心あり人心なし。たとひ父こそ訴訟の

習ひ。此方の事思ひながら。永々在京し給ふとも。左近尉情ある者ならば。自らが名をも朽たし。母御に思ひをかけ申す事よもあらじ。あはれ父御に此恨みを。語り申し候はゞや。

シテ「たとひ訴訟はかなはずとも。父諸共に添ふならば。かくあさましき事よもあらじ。

地「いつまでか。かゝる憂き目を水鳥の。はかなく袖をぬらすべき。

男詞「是はさて何事を御歎き候ふぞ。歎くことあらば我屋に歸りて御歎き候へ。御覧候へ余の田の鳥は皆立ちて候ふが。左近尉が田の鳥はいまだ立たず候。何の為め雇ひ申して候ふぞ。

子「悲しやな家人にだにも恐るれば。身の果さらに白露の。

シテ「晩稻の小田も刈りしほに。色づく秋の村鳥を。

子「苧生の浦舟漕ぎ連れて。

シテ「思ひくゝの囃子物。

子「あれくゝ見よや。

シテ「よその舟にも。

地「打つ鼓。く。空に鳴子の村雀。追ふ声を立て添

へさて。いつも太鼓はとうくと。風の打つや夕
波の。花若よ悲しくとも。追へやく水鳥。いと
せめて。恋しき時はうば玉の。夜の衣をうちかへ
し。夢にも見るやとて。まどろめばよしなや。夜

寒の砧打つとかや。

シテ「恨みは日々にまされども。

地「恨みは日々にまされども。あはれとだにもいふ人
の。涙の数そへて。思ひ乱れて我心。しどろもど
ろに鳴る鼓の。筋なき拍子とも。人や聞くらん恥
かしや。

シテ「家を離れて三五の月の。

地「限なき影とても。待ち恨みとことにはに。心の闇は

まだ晴れず。

シテ「すはく村鳥の。

地「すはく村鳥の。 稻葉の雲に立ち去りぬ。 又いつか逢坂の。 木綿附鳥か別れの声。 鼓太鼓うちつれて。 猶もいざや追はうよ。

男「あらうれしや今こそ某が田の鳥は皆立つて候へ。 先々御休み候へ。

ワキ詞「鳥追舟に詠め入りて。 故郷に帰るべき事を忘れて

候。 舟ども多き中に。 羯鼓と鳴子をかざりたる舟おもしろう候。 此舟を近づけ見ばやと存じ候。 如何にあれに羯鼓鳴子かざりたる舟を近う寄せよ。

男「あら不思議や。 此あたりに於て。 左近尉が舟あれよせよなど、いはうずる者こそ思ひもよらね。 これは旅人にてありげに候。 天晴存外なる者かな。

ワキ「あの舟よせよとこそ。

男「是は中々不審なりとて。漕ぎ浮べたる鳥追舟。さし近づけてよくく見れば。是は日暮殿にて御座候ふか。

ワキ「あらめづらしや左近尉。あれなるは汝が子にて有るか。

子「いや是は日暮殿の子にて候。

ワキ「さてあれなるは汝が母か。

子「さん候母御にて御入り候。

ワキ「それは何とて賤しき業をばいたすぞ。

子「父は在京とて。また音信も候はず。頼みたる左近尉。此秋の田の村鳥を追へ。さなくは親子もろともに。我屋の住居かなふまじと。いふ言の葉の恐ろしさに。身を捨舟に羯鼓を打ち。ならはぬ業を汐干の浪。あさましき身となりて候。

ワキ詞「言語道断の事。夫れ弓取の子は胎内にてねぎことを聞き。七歳にて親の敵を討つところ見えたれ。

況んや汝十歳にあまり。さこそ無念に有りつらんな。唯是と申すも某が永々在京の故なれば。一しほ面目なうこそ候へ。唯今左近尉を討つて捨てうずるにてあるぞ。此方へ来り候へ。如何に左近尉。おのれは不得心なる者かな。汝をめのとに付け置く上は。さこそ煩ひも有りつらん。如何さま国に下るならば。如何やうなる恩賞をもなどゝ。都にてあらましかひもなく。結句主を追つ下げて。

下人に使ふべき謂ばしあるか。何とて物をば言はぬぞ。

シテ「めのとの科もさむらはず。唯久々に捨ておきたる。花若が父の科ぞとよ。あやまつて仙家に入りて。半日の客たりといへども。故郷に帰つてわづかに。七世の孫にあへるところぞ。承りて候へとよ。況んや十余年の月日ありくゝて。今日しもかゝる憂き業を。見見え申すは不祥なり。

地 「たゞ願はくは此程の。恨みを我等申すまじ。左近

尉が身の科を。親子に免しおはしませ。

ワキ 「此上は。否とはいかゞ稲薙の。

地 「小田守も秋過ぎぬ。はやくゆるす左近尉。

地 「さて其後に彼人は。く。家を花若つぎざくら。

若木の里に隠れなき。五常たゞしき弓取の。末こ

そ久しかりけれ。く。